

# 島之上遺跡出土大木式系土器の周辺

谷井 彪

埼玉県北部地域、特に秩父の谷筋からでた荒川が東北に流れる中流域以上の地域は、かつて発掘調査された縄文時代の遺跡が極めて少なかった。著名な遺跡としては縄文早期の爪形文土器などが出土した岡部町の西谷遺跡があったが、多くの遺跡では断片的な土器の出土が知られているのみであった。

昭和40年代以降になると、県内各地で各種の開発が進められる一方、開発に伴う埋蔵文化財の保護体制が整備され、開発にかかる各時代の遺跡が調査されるようになった。縄文時代中期の遺跡も調査例が次第に増加し、集落のほぼ全体が調査対象となる例もみられるようになった。

このような調査として最も早い時期に行われたのは、昭和41年に調査された川本町舟山遺跡(註1)であろう。断片的な調査ではあったが、多量の早期末から前期初頭の土器群、前期後半の諸磯式土器群のほか、中期の住居跡が6軒検出され、この地域の土器群の様相がはじめて明らかになった。

その後、岡部町水窪遺跡(註2)の調査も行われたが、本格的な調査が行われるようになったのは、上越新幹線建設に伴って調査された深谷市島之上遺跡、出口遺跡(註3)からであろう。以降、花園町台耕地遺跡(註4)、北塚屋遺跡(註5)と相次いで大規模な調査が行われ、さらに児玉工業団地の造成に伴う調査では、集落のほぼ全体を調査した古井戸遺跡(註6)と隣接した同時期の集落である将監塚遺跡(註7)の2つの集落の実態が明らかにされた。これらの遺跡の分析は各報告者によって行われ、様々な問題が提起されているが、土器だけでも出土量は膨大であり、今後様々な角度からの検討が可能な素地ができたといえるであろう。

ところで、今回取り上げた島之上遺跡から出土した大木式系土器は、先の水窪遺跡からやや南に位置する深谷市域にある。この大木式土器は距離的に近接している水窪遺跡の大柄渦巻文の土器と同様、この地域の土器群の様相を考える上で一つの材料を提供できると思われることから、今回取り上げることにしたものである。

大木式土器が関東地方の加曽利E式土器と相互に密接な関係のあることは、多くの識者により指摘されているが、加曽利E式変遷各段階での相互の関わり方は必ずしも一様ではない。このうち加曽利E式成立期における大木式との編年対比や文様要素相互の関係については、活発な議論が行われるようになった。

筆者も両者の関係を何回か検討したが、大木式そのものは単純でなく、いくつもの系列があり、

さらにその地域独自の変形が加えられて土器が製作されている。一方の加曽利E式土器の方でも大きくは下総台地型と武藏野台地型の二タイプが存在（註8）するほか、いわゆる中峠式、三原田式、淨法寺タイプなど、周辺土器群との関係や地域の独自の変形が強くでている分布域の比較的狭い土器群が存在するといったことも加わっており、現状では必ずしも十分な整理ができないといえよう。これに加えて、加曽利E式の成立期も系統の異なる二タイプが存在することでわかるように、関東地方独自の展開がみられ、単純な解釈では解決が不可能であり、今後に残された課題が大きい。

近年、石坂式らは今回取り上げた大木式土器の胴部に描かれた渦巻文とも関係する大柄渦巻文を持つ「胴部隆帯文土器」について検討している。氏らは周辺土器群の対比、関東地方での受容過程や展開を追っている。さらに、いわゆる梶山タイプの土器（註9）は、系譜が大木式にあるにしても、関東地方で独自に変形し、加曽利E式土器の一タイプとして展開を遂げたとした（註10）ことを指摘した。梶山タイプについての本格的な論究であり、加曽利E式土器後半にみられる大木式系要素に対する分析でもあった。

従来、加曽利E式後半の土器を取り上げる時は、中部地方の曾利式との関係や、加曽利E式の一大タイプである連弧文土器の展開、系譜が議論の中心で、大木式との関係を積極的に取り上げられるることは少なかった。この点からも石坂氏らの研究は新たな分野を開拓したものであり、今後の研究を進める上で指標となる論文の一つといえよう。

本稿で扱うタイプは、氏らの取り上げた土器の隣接した位置にある土器である。一部言及されているが、論考の中心が梶山タイプにあり、これらの土器が直接分析の中心からはずれているため十分な検討は行われていないが、関係する土器の大半は共通する。今回本稿を進めるに当たって大分参考にさせていただいた。

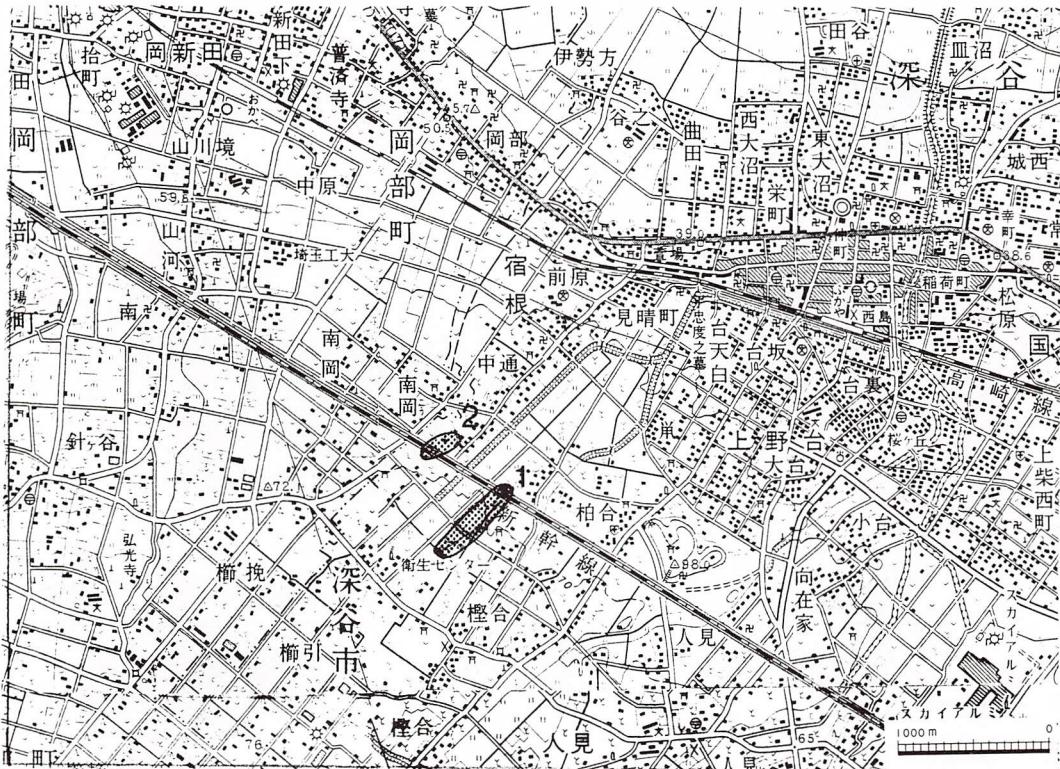
## II

島之上遺跡は深谷市大字柏合字島之上にあり、高崎線深谷駅の南西1.5kmほどに位置する。深谷市は高崎線を挟んだ地域で、南西側に櫛引台地、北西側に妻沼低地が広がる。妻沼低地の北には利根川が流れ、その先は群馬県域となり、隣接して栃木県が位置する。

櫛引台地は荒川の扇状地で、荒川が秩父山地から抜ける寄居町付近は扇央に当たる。扇央部付近の標高は100mで、扇端部は50mほどとなる。この台地は平坦面が広く、谷地形はあまり発達していない。島之上遺跡はこれら数少ない谷のうち、小山川へ流れ込む西川と上唐沢川が形成した浅い谷に挟まれた台地上に形成された遺跡である。扇状台地の端部からは1.5kmほど入り込んだ台地奥である。往時から遺跡の前面に広がるこの小さな川は、枯れることがなかったのであろう。

遺跡は両河川に挟まれた南西から北東に伸びた微高地状の台地に細長く広がっている。全体で800m続くが、発掘調査されたのはその北東端に当たる。この谷筋では数少ない中期の遺跡のうちで、最大の遺跡であり、谷の最奥の遺跡である。他の大きな遺跡との交流するためには谷筋を下って低地帯まででる必要があり、周辺の遺跡との交流は少なかったであろう。

島之上遺跡から発見された遺構は、住居跡3軒、土壙16基であった。時期は加曽利E II式が2軒、



第1図 島之上遺跡の位置 1 島之上遺跡 2 出口遺跡

Ⅲ式が1軒である。報告者である笹森健一氏は、土器の文様の施文工程の観点から各期の特徴を抽出し、分析した。連弧文土器も文様モチーフ、施文手法から分類し、編年を組み立てている。この報告での連弧文土器の考察は、以降の連弧文土器研究の基礎となっている。

### III

第2図が島之上遺跡から出土した加曽利EⅡ式土器の主なものである。1から4が1号住居跡、5から7が2号住居跡、8から12が3号住居跡、13、14が16号土壙である。

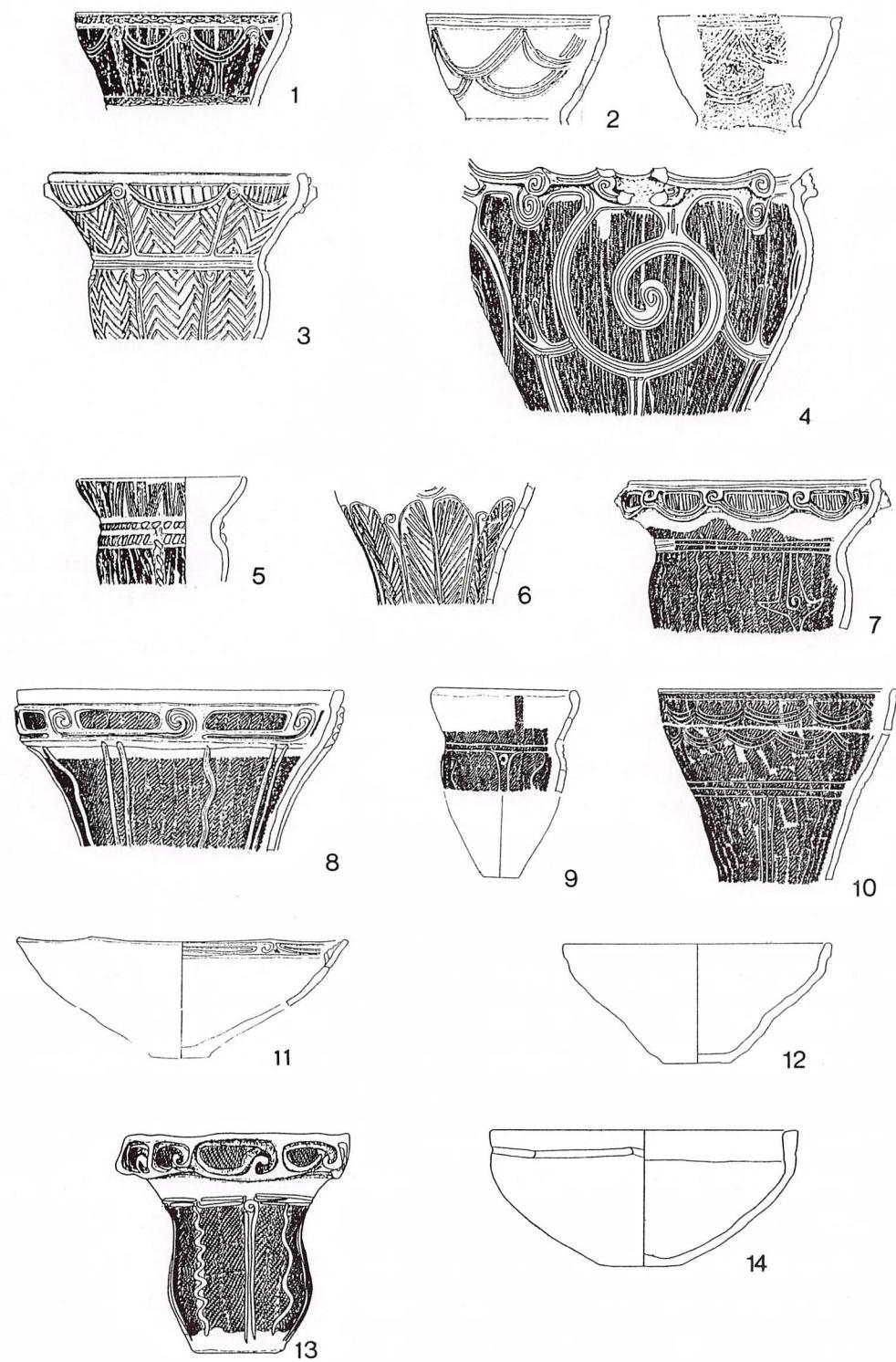
ここでは報告書から各遺構出土の土器の編年に関わる部分で、報告者が要約した特徴を中心にみていこう。

今回取り上げる大木式系土器の出土した1号住居跡について

- 1 古い階段の炉に使われた連弧文土器1は、3号住居跡の床面から出土した10と共に通の区画文を施す。
  - 2 覆土から出土した連弧文土器2は1より後出の要素がある。
  - 3 伏甕3は綾杉状の地文であることから曾利Ⅲ式段階である。
- と要約し、1が加曽利E式第1段階、2から4が第2段階とした。

2号住居跡の土器については

- 1 埋甕の土器5は曾利Ⅱ式系統だが、志久遺跡第1号住居跡、板東山遺跡第27号住居跡から出



第2図 島之上遺跡出土主要土器

土した曾利Ⅱ式よりも後出的である。

2 床面の土器は6が曾利Ⅲ式、7の炉体土器と確実に伴出している。

と要約し、加曾利EⅡ式第2段階とした。

3号住居跡の土器については

1 8は頸部無文帯が消失している。

2 8は繩文を施文した後、隆帯を貼り付けた加曾利EⅠ式からの手法である。

3 連弧文土器10が伴出している。

4 9は曾利Ⅱ式段階である。

と要約し、第1段階とした。

16号土壙の土器については

1 口縁部渦巻文をもつキャリパー形土器の後出的手法がみられる。

とし、加曾利EⅡ式第2段階としている。

報告書では出土位置について若干の混乱があるようであるが、編年軸などの大枠ではうなづけるものである。ここでは第1号住居跡の2を除いて加曾利EⅡ式第1段階に当てる。第2号住居跡の場合は、住居跡の掘り込みがほとんどみられないことや炉体土器7と5、8の器形、文様の特徴から隔たりが大きく、とりあえずはそれぞれの土器を切り離して考えてよいのではないのだろうか。7は第1段階、5、6は古くみて第2段階、おそらく第3段階と思われる。16号土壙例は加曾利EⅡ式中葉としている。確かに10の口縁部の文様施文順位や口縁部と胴部に転がされた繩文の回転方向が異なるなど新しい要素がみられるが、土壙内での伴出状況から浅鉢と共に伴したことは確実と思われる。加曾利E式での無文の浅鉢の展開の系譜からすると、14の器形はEⅠ式に特徴的な器形であり、Ⅱ式段階になると、3号住居跡例にみられるように、口縁部が立つ器形ではなく、底部から直接的に開く器形が主流となる。したがって14は新しくなったとしても加曾利EⅡ式段階に残った例と考えられよう。10の土器にみられる特徴はこの視点から改めて検討してみる必要があるよう思う。ただし、ここで提起された頸部無文帯が加曾利EⅡ式の新しい段階にも存在していることを否定するわけではなく、東北地方との関連を含め別の角度から検討する必要があるだろう。

のことから島之上遺跡出土土器は、加曾利EⅡ式第1段階から第2段階がまとまっていることがわかる。しかし、なんといっても出土量が少なく全体像を明らかにすることはできないが、少なくともいくつかの点は指摘できよう。

第一に、加曾利EⅠ式終末からEⅡ式前半に突如として登場する連弧文土器がその中心地とほとんど変わらない時期から盛んに使用されるようになることが挙げられる。文様モチーフも1にみられるように連弧文の成立期の基本形を思わせるモチーフであり、その成立がどの地域かを特定できないが、いち早く広がっていることを示す例である。

第二には、キャリパー形土器が比較的安定して存在していることである。分布の中心地とされる武藏野台地から多摩地域といった関東地方西部地域では、連弧文土器の全体で占める量が圧倒的に多く、大半が連弧文土器で占められ、これに曾利式系土器（ただし、当然大半が関東化されている）が加わっている。口縁部に渦巻文を持つキャリパー形土器が極めて少なく、その実態すらほとんど

わからないといった状態に比べると、島之上遺跡周辺の遺跡群と大きな違いがある。

第三に曾利式系土器の出土がかなりみられることも指摘できよう。図示したものでは綾杉状の条線を地文としたものである。そのほか、5のように大きく開いた口縁部に条線文の施された土器で、籠目文の曾利Ⅱ式系土器とされるものが一定の割合で存在することである。ただし、このタイプのうち口縁部を無文とする土器は、加曾利E式成立段階で関東地方的土器として定着しており、その後裔と考えられる9のようなタイプは、加曾利E式本来の土器と考えるべきであろう。

しかし、遺跡全体の土器量ははるかに台耕地遺跡周辺の遺跡の方が多いためか、島之上遺跡にはみられない土器群もいくつか知られる。象徴的なのは大甕といわれる大形土器で、無文の口縁部が大きく外反し、頸部区画線下の胴部に大柄渦巻文が施文される土器である。台耕地遺跡に隣接する北塚屋遺跡でも断片的資料が知られる。このタイプは5の器形を著しく大形化した土器で、胴部に施される大型渦巻文の存在から唐草文土器に関連し、その要素どれをとっても中部地方の土器と結び付き、必然的に系譜を中部地方の土器に求めるることは自然である。

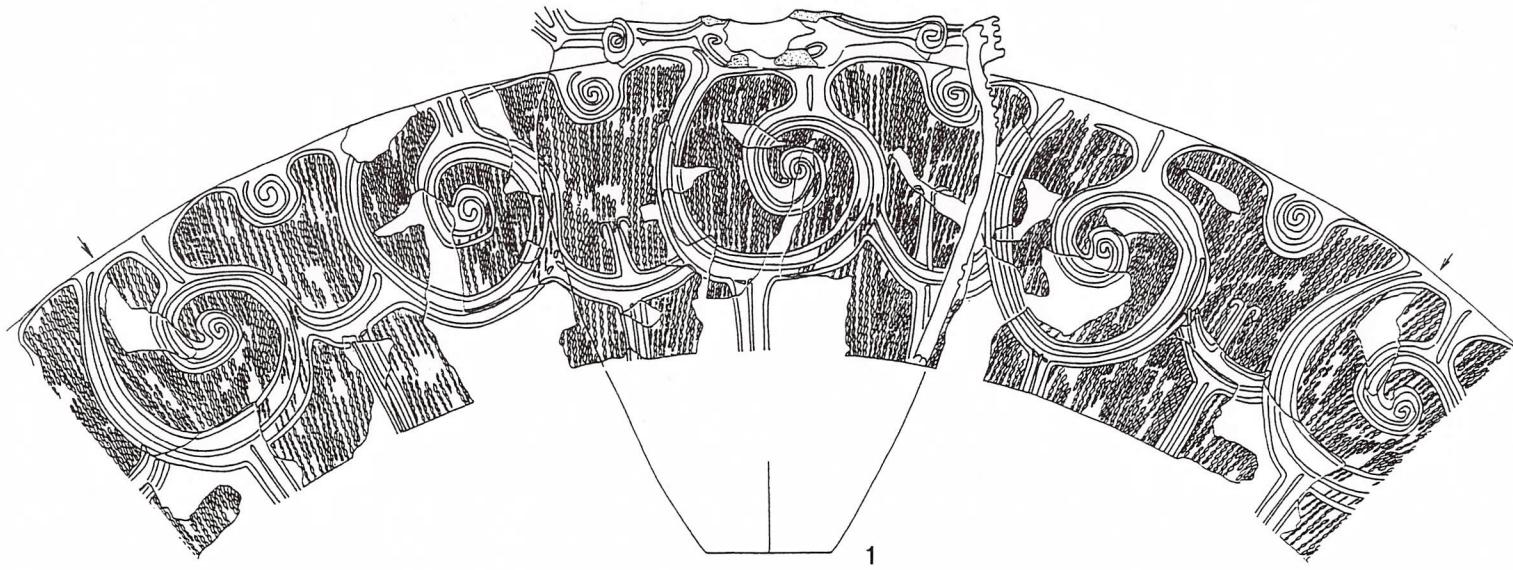
島之上遺跡で出土したこのタイプは破片を含めて図示されたものではなく、必ずしも出土量の多い土器でないことがわかる。北塚屋遺跡の報告者である黒坂氏は、加曾利EⅡ式後半に大甕が組成内に一定の割合を示し、その系譜について、祖源とされる甲信・伊那谷系大甕と一線を画すとしている。しかし、荒川沿いの台耕地、北塚屋両遺跡でも島之上遺跡にみられないことを裏付けるように、量的に多くはない。

これに対して、秩父山地の東の台地に取り残された第三紀の松久丘陵を隔てた北側に広がる本庄台地の奥に形成された将監塚遺跡や古井戸遺跡では、この種の大甕が目立っている。検出された住居跡軒数が圧倒的に多いとはいえ、丘陵を挟さむと、組成に違いが存在する可能性も考えられる。今後島之上遺跡周辺での多量の土器の検出を待たなければならないが、狭い地域内で土器組成が異なることを示す一例となるかもしれない。

なお、地文に綾杉条線が使われるのもこの地域の特徴である。かつて、筆者が舟山遺跡の調査、整理を通じて感じたことは、ほとんどが断片的な破片であったが、かなりの量の曾利式系土器群が存在したこと、特に綾杉状沈線がキャリパー形土器の地文として採用されている例の多いことが、この地域の土器群の特徴の一端を裏付けている。

このような特徴を持つこの地域の加曾利EⅡ式について、鈴木氏は編年を軸として、この時期の地域性を分析した（註11）。主に台耕地遺跡の土器を主題としながらも周辺地域の土器もくまなく視野に入れて進められている。今まで述べたようなこの地域の特徴についても、時期を追って体系的に示されている。詳細は鈴木論文を参考にしていただきたいが、ここでは、連弧文土器の起源について重要な指摘があるので触れておきたい。

氏はキャリパー形土器の口縁部文様帯が島之上遺跡の3や7の土器のように、口縁部文様帯の渦巻文を弧状の隆帶で連結されるモチーフの起源について、「大木8a式土器の影響を受けた関東地方においては、前段階以来の横S字文ないしはクランク文に加え渦巻文間に弧状モチーフが一中略一器種として分化定着をみ一中略一頸部無文帯の喪失が進行する」なかで、3の土器のような中部地方的キャリパー形土器に採用されて連弧文土器の下地となり、1のような連弧文土器を生むの



第3図 島之上遺跡出土大柄渦巻文土器展開図

ではないかとしていた。渦巻文をつなぐ弧線を大木式に求めたことは従来にない新たな提案であり、並べて比較してみると一見してわかるように器形だけでなく文様帶構成などの全体構成もきわめて類似しており、鈴木氏の指摘どおり、中部地方の弧線文の構成となる土器と連弧文土器との関連性の強さを示す貴重な例といえよう。

#### IV

第3図は、第2図4の島之上遺跡1号住居跡出土土器の胴部文様帶を展開したものである。口縁部には四単位の大形把手が付くと思われるが、把手部は欠損し、基部がわずかに残っていた。胴部下半もほぼ水平で切られたように欠損している。

器形はいわゆる樽形で、口縁部文様帶直下に最大径があり、底部に向けて直線ぎみに移行する。口縁部は外反りぎみに内傾し、先端ではまっすぐ立っている。

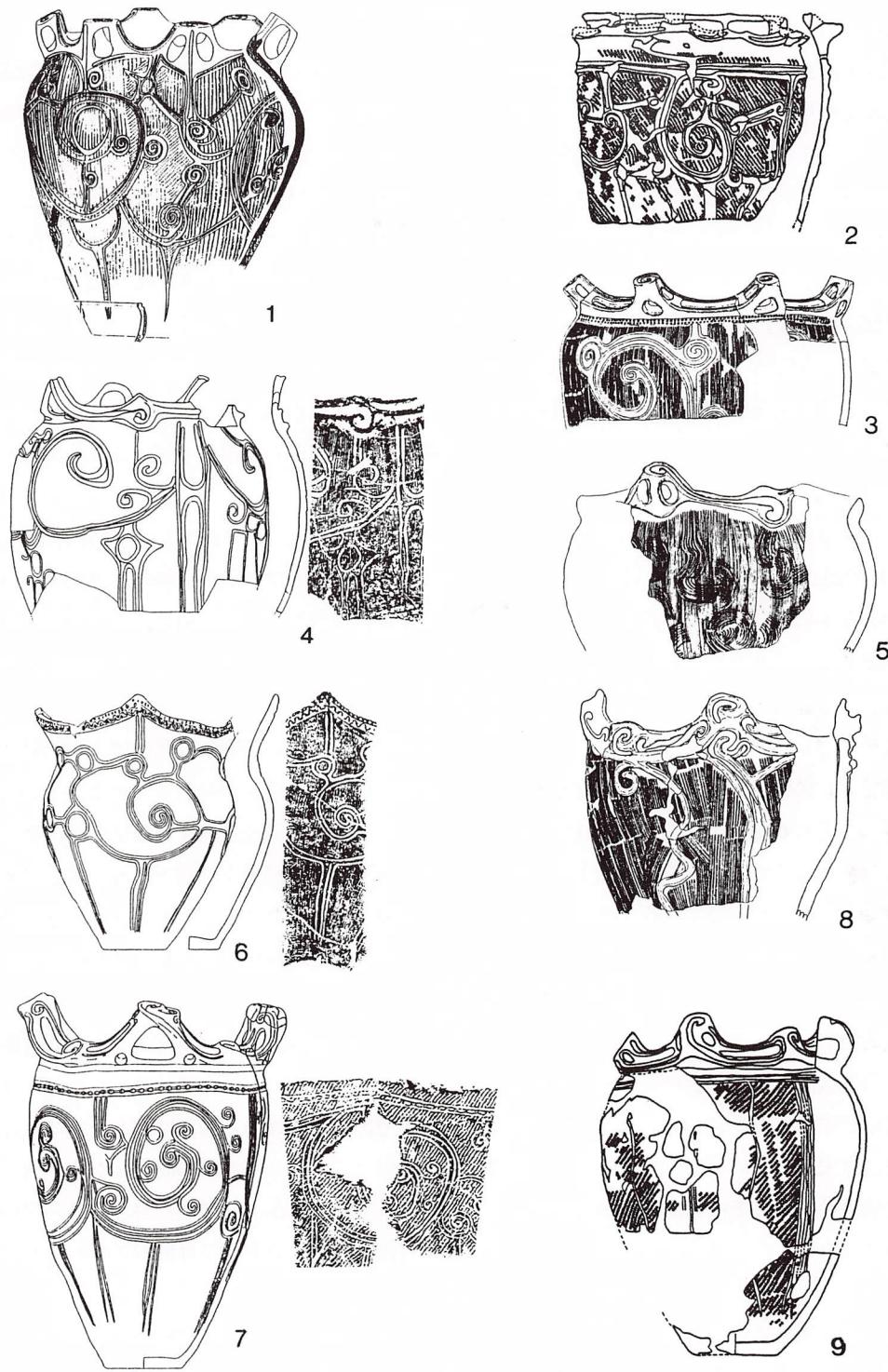
口縁部には、四単位の把手が付くが、器面に残った欠損部は4つに分かれている。後述するように他のこのタイプの口縁部形態を参考にすれば、大形の橋状把手が付くのであろう。把手部には下半の両側に配された小渦巻文から伸びる沈線、口縁部縁帶から伸びる沈線が把手の橋状部へ至る。把手と把手の間は口縁部を肥厚させ、中央部に沈線の引かれた縁帶が付き、その中間部に渦巻文の小突起が配しており、口縁部分文様帶区画は8つに分けられることになる。

胴部の文様帶は器面のLの撲糸文を全面施した後、3本沈線を基本としたモチーフが展開する。文様モチーフの骨格は、把手部直下に描かれた四単位に配された大柄な渦巻文である。この渦巻文自体は相互に連結せず、渦巻と渦巻の間を弧状文でつなぐ。渦巻文と弧状文の最下端からは八単位の直線の懸垂文が下りている。口縁部下の大きな渦巻文と渦巻文の間には小渦巻文が置かれる。第3図では胴部文様を展開したため口縁部の突起の渦巻文と口縁下の沈線の渦巻文とずれているが、第2図4の実測図でみると、口縁部小突起の直下であり、両者の位置関係は密接といえよう。また、渦巻文をつなぐ弧状文から渦巻文へは先端で羊角状となる2本の沈線が伸びている。

なお、文様描出に使われた3本沈線間の地文は、ほとんど消えており、磨消繩文的效果はみえるが、撲糸文の痕跡が残っている部分もかなりある。他の文様施文と同様、沈線施文後器面を整えるためなでられており、意識的に沈線を消したかは意見が分かれよう。間隔を開けずに密接して使用される3本沈線の場合、加曾利EⅡ式段階でも地文を残した例が多く、大半の土器が明らかな磨消繩文といえるようになるのは、間隔の開いた沈線を懸垂文として使うようになるⅡ式でも中葉以降であろう。

#### V

以上が島之上遺跡の大木式系土器の概要である。通常の年代比定に従へば大木8b式となる。先にも触れたが、大柄な渦巻文を持つ土器には、胴部で括れる樅山タイプの土器がよく知られている。最近の検討では直接な大木式系土器ではなく、関東地方で変形をとげて成立したものと考えられるようになっている。石坂氏らは樅山タイプの対比資料として第5図のような東北地方の関係土器を



第4図 大柄渦巻文を持つ樽形土器の類例（1） 1 大畠貝塚 2、9 不動院裏遺跡  
3 御城田遺跡 4、6、7 上之原遺跡 5 梨木平遺跡 8 将監塚遺跡

取り上げている。このことからモチーフそのものは大木式本来の要素を持つ土器と考えていたのではないかと思われる。

第4図は、樽形の器形であること、口縁部に沈線が引かれる縁帶状の文様帯を持つこと、胴部に大柄渦巻文が描かれるこの3つの観点で関係する土器を集めたものである。直接的に関係するのは、2、4～7、他は胴部モチーフが異なることから、周辺の土器である。

1は大畠貝塚例（註12）で、大木8b式とされる。特徴としては、地文が撫糸文であること、六単位の橋状の大形把手がつくこと、胴部のモチーフは3本沈線を主にした三単位の大柄S字文が展開すること、渦巻文の各所に小渦巻文が付加されていることなどが挙げられる。第3図との対比を考えれば、渦巻文のモチーフがS字文であること、三単位であることが異なる点であろう。また、このタイプの胴部モチーフとしては、渦巻と渦巻を連結したS字モチーフの存在は、単体の渦巻文の両者があることを示す。この土器で最も注意されるのは三単位構成がとられることである。いまのところ他に例がなく、三単位という関東的な単位数がこのタイプの土器にも採用されることを示している。

2から4は栃木県上之原遺跡（註13）から出土したものである。2、3がJD-94号跡、4がJD-71号跡の出土である。3は口縁部に連弧文土器の口縁部文様帯が付けられ、頸部は連弧文土器にみられるようなくびれがみられる。このことから、2の年代は連弧文土器出現以後のものといえる。4は伴出土器にキャリパー形土器の破片があり、この土器の年代から加曽利EII式初頭頃をさかのぼることはない。

2の特徴としては、橋状把手がつくこと、地文が条線であること、胴部に縦区画線となるH字文があること、文様描出が2本沈線となること、大柄渦巻文が縦区画線から派生していることが挙げられる。島之上遺跡例を基本形とすれば、崩れがみられる一方、器面を分割する縦区画線が残っていることを示している。3は括れ部上半が連弧文土器、下半が大柄渦巻文土器であり、両者の要素が折衷して作られたものである。渦巻文の描出は2と同様2本沈線であるが、モチーフの展開は渦巻文が独立し、渦巻文とのつなぎに弧状文などが使われていることが加わり、島之上遺跡例に近いといえよう。

地文条線ということでは6の栃木県御城田遺跡（註14）SK286の出土例が挙げられる。報告書では8つの橋状把手が図示されている。把手はいずれも同じ形態として示されている。しかし、通常は大把手の中間に渦巻文の突起が置かれているのが普通である。破片からの復原のため、実際と異なった復原図になっている可能性もある。胴部は地文条線文の上に3本沈線の渦巻文が描かれている。大柄渦巻文のモチーフは上端から派生しておらず、S字になるか、隣接した渦巻文から派生するかははっきりしない。地文が条線文である2に比べると、胴部のモチーフは原形に近いといえよう。

これらの文様帯構成の土器に対して、4の場合は、全体の器形を始め、橋状把手がつくこと、大柄渦巻文が連続して四単位並ぶことでこの類にまとめられるが、いくつかの特徴がある。地文が繩文であること、渦巻文の派生が直接隣接した渦巻文から伸びていること、大畠貝塚例と同様、大柄渦巻文の各所から小渦巻文が派生していることなどがあるが、最も注意されるのは口縁部文様帯と

胴部文様帯の間に無文帯が置かれているという、全体の文様帯構成上の問題である。

4と同様に、口縁部と胴部文様帯の無文帯が置かれているものに栃木県不動院裏遺跡（註15）F17例がある。器形的には樽形で、胴部にも地文繩文上に2本突帯の隆沈文の渦巻文が配されるなど、基本形には近いが、上端には区画線があり、キャリパー形の胴部文様帯的扱いである。しかし、口縁部文様帯は頸部無文帯が置かれるほか、他の例と著しく異なる口縁部文様帯が採用され、平縁となる。口縁部のあり方は大木8a式古段階の円筒形土器にみられる2条の突帯の系譜上にあるもので、要所要所で橋状につないでいる。下端の突帯には突帯を割る短切線が連続して引かれる。

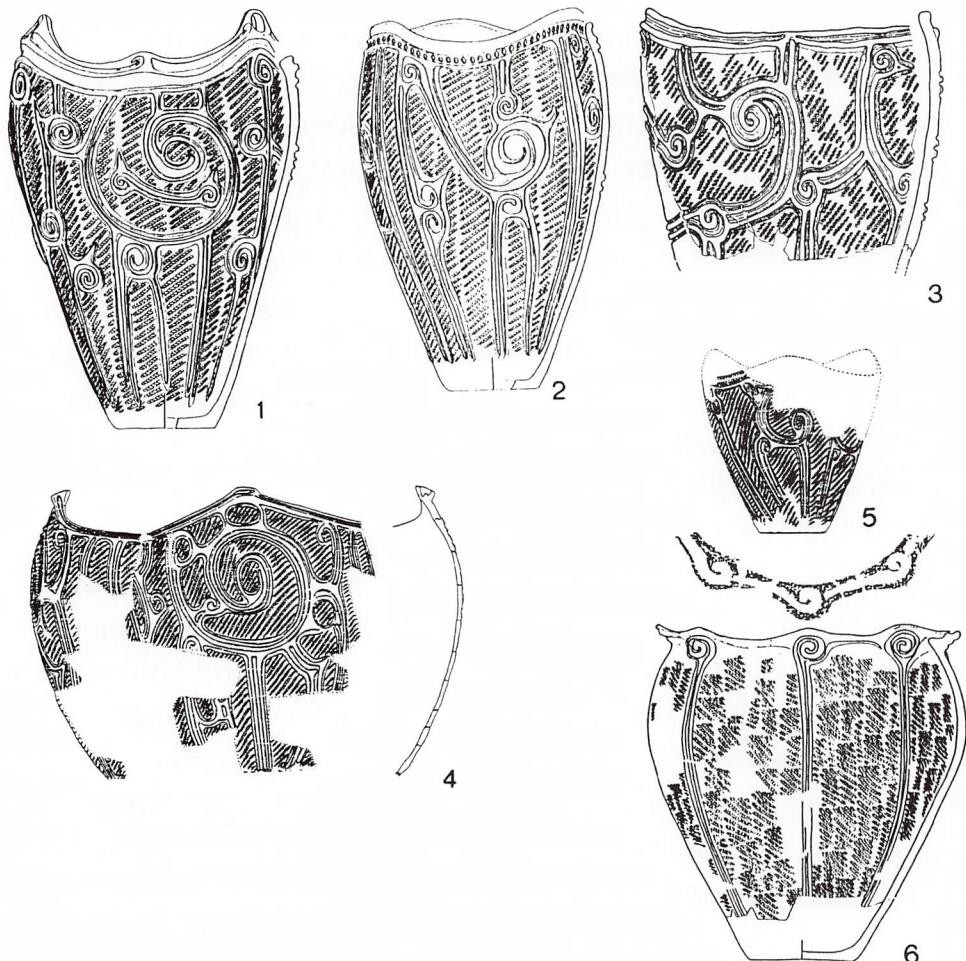
この土器に伴出したキャリパー形土器は、口縁部に波状隆帯が巡る古い段階からみられるモチーフの土器もあるが、頸部無文帯が消失したもの、大木8b式の胴部文様帯の象徴である曲折文が置かれ、頸部素文帯の区画の出現したものがある。加曽利EⅡ式でも最も古い段階といえよう。

不動院裏遺跡では樽形の器形となるものに6のほか、懸垂文のみの展開する例がある。この土器の口縁部は5とは異なり、他のこのタイプの一般的口縁部形態である4つの橋状把手が付く。このタイプの口縁部形態と5の胴部文様帯を組み合わせれば、他の要素と共に通することになる。

周辺の土器の例と異なるが、この種の全体の器形と口縁部形態をとり、胴部に異なったモチーフの付く土器がいくつか知られている。7~9、第5図6がこれに当たる。9は先に述べたように懸垂文の文様帯に置換した例、7、8は条線地文のもので、櫛歯を反転させながら引いて描いたモチーフがみられるもの、8は隆帯帯の懸垂文となるものである。7が梨木平遺跡（註16）、8が埼玉県将監塚遺跡である。出土量は決して多くはないが、加曽利E式としても異質なものとして排除されていないことは示していよう。第5図6は福島県天光遺跡（註17）1号住居跡例で、全体の器形は樽形であるが、口縁部の形態は全く異なり、胴部も懸垂文のみで、関東地方例と大きな隔たりがある。東北地方的あり方といってよいかも知れない。

東北地方でこのタイプと類縁関係にあるものとして第5図に示したいいくつかの例がある。1、2が繫遺跡（註18）例、3が大館町遺跡（註19）例、4、5が大地渡遺跡（註20）で、いずれも岩手県の遺跡から出土したものである。特徴としては、いずれも把手や突起といったものが発達せず、波状口縁となること、したがって口縁部は天光遺跡例より一層簡素である。文様の単位は4が四単位として復原されている他、二単位となるもの、三単位となるものが存在する。胴部に展開する大柄渦巻文は2本隆帯隆沈文で描かれ、3本沈線で描いたものが存在しないことも加わる。また、1、2例などでは渦巻文間が開いており、途中に小渦巻文を挟むとはいえ、口縁下から底部近くまで直線状に下る隆帯があり、文様の縦の区画がかなり意識された結果であろうか。これら諸点はいずれも関東地方の諸例や大畠貝塚例と異なる点である。

これらの土器の年代は、いずれも大木8b式と分類され、そのなかでも新しい段階に位置付けられているようである。筆者が東北地方のこの時期の遺跡例をあまり知らないためかも知れないが、この種の器形や文様帯の類例をあまりみつけることができなかった。石坂氏らの論考で取り上げられている土器には、この他岩手県荒谷A遺跡、片巣遺跡、貝鳥遺跡例がある。いずれも岩手県立博物館でまとめた『岩手県の土器』（註21）で示されたものが中心であった。樽形といったこの種の器形だけに限定すると、それほど量はないように思われる。また、8a式の後半から8b式の前半

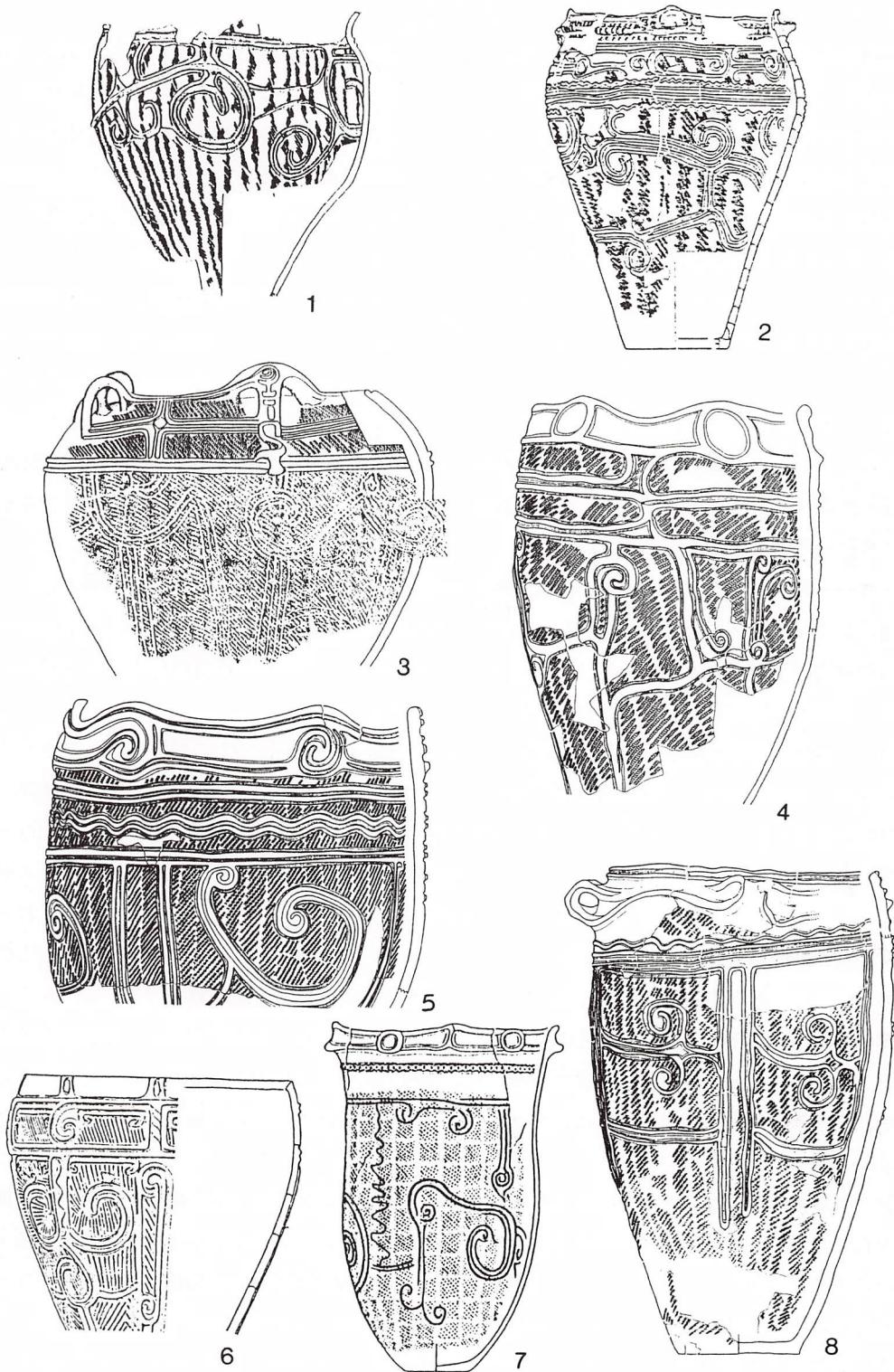


第5図 大柄渦巻文を持つ樽形土器の類例 (2) 1、2 繫遺跡 3 大館町遺跡 4、5 大地  
渡遺跡 6 天光遺跡

でこの種の祖形と思われる土器の存在も希薄といえるのではないか。東北地方南部から関東地方北部でもこのタイプの祖形を思わせる直接の資料は見出せず、系譜関係をたどることはできないが、大柄渦巻文をとる土器、樽形の器形とに分け、それぞれの観点から考えればいくつかの例がある。

まず、大柄渦巻文の描かれる例を一瞥してみよう。阿玉台II式段階の七郎内C遺跡（註22）には四単位の突起が付き、胴部上端で大きく張り、把手下に渦巻文が配されたものがある。時期的な隔たり、把手の形態や渦巻文の描出手法を除けば、よく似たものといえる。次段階の阿玉台III式では栃木県湯坂遺跡（註23）T1-V土壙例がある。S字文的モチーフの例は、器形が異なるが、同じ湯坂遺跡例に存在する。

しかし、阿玉台IV式段階になると、器形的には茨城県諏訪遺跡（註24）例などいくつかの例が知られるが、現状では大柄渦巻文と結び付いたものはあまり知られていない。この時期で大量の土器が出土した栃木県槻沢遺跡（註25）でも胴部の張る器型は存在するが、大柄渦巻文と結び付いたも



第6図 大柄渦巻文及び樽形器形の類例 1 湯坂遺跡 2 諏訪遺跡 3 梨木平遺跡  
4、5、8 大館町遺跡 6 梨久保遺跡 7 大木圓貝塚

のはみられなかった。

関東地方北部を中心とした阿玉台IV式の時期は、阿玉台式系、前段階からの大木式系のほか、新たに中峠式（註26）、三原田式（註27）、浄法寺タイプ（註28）を生む火炎土器といった多様な土器群が並立するといった、従来あまりなかった現象が生じている。このことは地域によってそれぞれの系譜の土器の占める比重の異なる可能性が高い。前段階でも大柄渦巻文を持つタイプの土器は、全体に占める割合が必ずしも高くなかったわけで、タイプの多様化が進むため、量的比重が著しく下がり、目立たなくなっているといった可能性も考えられる。

このタイプで注目される土器としては、第4図4の上之原遺跡例や口縁部文様帯と、胴部文様帯の間に無文帯の配された5の不動院裏遺跡例がある。6の御城田遺跡例でも胴部上端区画線がみられる。このことは、把手を中心とした口縁部文様帯と胴部文様帯の関係は、当初から密接したものではなく、本来その間に存在した頸部無文帯が省略されることで成立したことを示しているとも考えられる。このように考えると、先に挙げた七郎内C遺跡に代表される一連の土器群と同様な文様帯構成が取られていることになる。しかし、残念ながらここに至るまでの経緯は適當な資料が見出せず、今回は跡付けることができなかった。

把手部分と胴部文様帯の間にある文様帯が無文帯ではないが、文様帯のある数少ない例として、第6図の梨木平遺跡P-18土壤例がある。この例は伴出土器にS字文が口縁部に巡り、一本の蛇行沈線の懸垂文の下がるキャリパー形土器や、大木8b式とされる口縁部文様帯の付く注口土器などがあり、明らかに加曾利E I式中葉段とすることができるものである。

器形は口縁部が強く内湾し、胴部が球状に近く張る。器面には全面にRLの縦位繩文が施されている。全体の文様構成は、口縁部文様帯下端に引かれた2本の隆帶で2つに分割される。口縁部上端には橋状把手が配され、文様の単位区画の役割を果たしている。把手下と胴部との区間線間はS字隆帶文でつながる。把手間のモチーフは3本沈線を基本とした十字文である。胴部に描かれるモチーフは、左右対象に渦を卷いて羊角状となる渦巻文が配されるほか、大木8b式の特徴とされる曲折文が並ぶ。図示されたものが展開図でないため、全体のモチーフは不明であるが、おそらく胴部文様帯には羊角状渦巻文と曲折文の組み合わせた二単位構成になると思われる。

胴部に曲折文があることから大木8b式土器ともいえるが、曲折文の描出手法は、関東地方で描かれるこの種のモチーフに比べても崩れが著しく、亜形であることは明らかであろう。今回の主題である島之上遺跡例と直接対比すれば隔たりは大きく、系譜的にも異なり、極めて少ない例といえよう。

なお、対向する羊角状渦巻文が採用されることは、中部地方の唐草文土器の胴部文様帯では普遍的な存在である。しかし、本来大柄渦巻文の少ない関東地方ではきわめて例が少なく、後続する土器群の普遍的文様としては引継がれない。唐草文土器の出現時期や羊角状文の描出手法の違いなどを考え合せると、唐草文土器の羊角状文出現の系譜を考える時には参考となる一事例であろう。

一方、東北地方では口縁から直接渦巻文の胴部文様帯を持つ古段階の土器は存在しなかったが、樽形の器形で、胴部文様帯の上に口縁部文様帯が置かれる土器としては、第6図に示したようにいくつかの例がある。

第6図4、5、7、8は胴部渦巻文の上に文様帯の置かれる土器である。4、5が大館町遺跡RA102住居跡、8がRA619住居跡である。口縁部文様帯は4、5、7が2条の間隔を開けて走る隆帯間を円文(4、7)、渦巻文(5)でつなぐもので、隆帯間が無文となる。8の場合は四単位の上下隆帯に渡す橋状把手が付けられたもので、橋状把手下の区画には地文の隆帯が残っている。時期的には大木8b式段階であり、加曽利E式との平行関係は、I式後葉段階といえよう。

この口縁部のモチーフの系譜としては、東北地方南部から関東地方北部の大木8a式の2条の突帯の口縁部文様帯に起源し、突帯の平坦化と突帯間をつなぐモチーフの変形により生成されたものと考えられる。5の渦巻文は渦巻文出現以降多用されるモチーフの転用例を示すものといえよう。胴部のモチーフは1が1条隆帯による隆沈文、2が2条隆沈帯による隆沈文でもあり、古段階からの1条隆帯で文様を描く手法が残っていることを示している。モチーフも必ずしも定形化していない。

8の場合は、橋状把手があり、胴部のモチーフも縦区画線が明確で、区間線間も旧来の大木式的モチーフである。伴出土器からも大木8a式段階の可能性が強い。このタイプでは祖形的な土器といえるかもしれない。

これらの土器は底部から口縁にかけて内湾することでは樽形といえるが、器形全体は変化に乏しく、内湾の度合いも少ない。このタイプは東北地方特有の地方形といえる土器かもしれない。

このタイプに近い例として7の宮城県大松沢貝塚(註28)出土例を挙げた。4などの大館町遺跡例と比較した場合、器形上、口縁部の形態がやや外反りぎみであること、文様帯では明確な頸部無文帯が置かれ、胴部区画線下の文様帯がキャリパー形土器の胴部文様帯と同様な文様帯として扱われているといったことが大きな違いである。別系統であろう。一見した場合、口縁部形態やモチーフ、文様帯の配置はよく似た土器といえる。特に口縁部のモチーフは4の口縁部文様帯と全く同一といえるほどである。胴部モチーフの描出は3本単位の沈線で描かれる部分もあるが、1本沈線による蛇行沈線の懸垂文や、2本沈線で引かれた渦巻文などのモチーフを描くものもある。大松沢貝塚の土器には3本沈線で単位の繰り返しがはっきりしている定形的なものもあり、要素的には新しい手法といえるかもしれない。もう一つの違いである文様描出方法は、沈線と隆沈文といった違いがある。器形上の違いに由来する可能性もあるが、地域的な差、または個体差で両者の手法が共存している可能性もあるだろう。今後の課題でもある。

このほか、器形上類似する土器として、中部地方の唐草文土器とされる樽形の土器(註30)が挙げられている。筆者もかつて水窪遺跡の土器を扱った時(註31)、大柄な渦巻文が展開するということでいくつかの例を取り上げた。その時点ではこの文様帯に対する視点が欠けていたため、渦巻文の展開している胴部文様帯の上にある長方形区画文について、あまり気にかけていなかった。今回あらためてこのタイプをみると、初期の段階でかなりの量がみられることに気付く。唐草文土器では曾利Ⅲ式段階でも長方形の文様帯が残り、文様帯構成上胴部文様帯と強く結び付いていることもわかる。省略されるのが一般化するのは、多くの土器で口縁部文様帯が省略されるようになる曾利Ⅳ式段階になってからであり、唐草文土器自体も衰退する。

のことからも明らかなように、第4図4に示し、加曽利E式のキャリパー形土器の頸部素文帶的扱いになっている関東地方の例と比較しても、第6図の東北地方の諸例により近いことがわかる。

石坂氏らは、田中清文氏が唐草文土器は「一旦越後に入った大木式の要素が、越後で開発され、土着化し、その内の一派が千曲川を遡上して松本平西南部に入り、そこから諏訪と伊那谷に広がった」とする意見（註32）を取り上げており、その起源の由来と考えているようである。いずれにしてもこの種の頸部文様帶は東北地方南部から関東地方北部にかけて分布する大木8a式古段階の土器では少なく、東北地方北半の土器の方により広く採用されている。東北地方南部の資料が絶対的に少ない現状では今後の出土量の増加を待ちたい。

## VI

前項では、島之上遺跡例やその類似土器について、東北地方の関係する土器群を中心に検討してきた。たしかに、常に取り上げられる第5図の土器のように、器形、モチーフとも類似するものは存在する。しかし、すでに述べてきたように、両者の違いは大きなものがある。また、出現する時期も極めて限られており、前段階でその系譜を追おうとすると、第6図の一部の土器に行き当たってしまい、直接な系譜とは考えられない。石坂氏らは、渦巻文が胴部文様帶に採用された最古の例として将監塚遺跡J-106号住居跡の頸部に無文帶を持つキャリパー形土器を挙げている。伴出土器から判断すれば、古くても加曽利E II式中葉以降であり、今回対象とした土器より古くさかのぼるような加曽利E I式段階の例は今のところないようである。

次に、島之上タイプの性格を考える時の要素として、口縁部に付けられた把手の形態は重要である。そこであらためてこれらの土器の口縁部形態について見直してみよう。

単位数は1のような四単位が普通であるが、六単位となるものがある。四単位となる口縁部の構成は、橋状の大把手と途中に置かれた渦巻文の突起からなる。亜形の8では橋状把手にならないが、把手間に渦巻の突起が付き、構成は同一である。これに対して6つの大把手となる大畠貝塚例は、四単位の場合の大把手間の渦巻の突起が橋状把手に代って付けられたものであろう。ちょうど3のような復原例と同じ結果になる。したがって、単位数のあり方だけでなく、その構成でも変形していることになる。

ところで、この橋状の大形把手形態は、加曽利E式始源期にみられる箱状把手といわれるものと類似し、平坦になった上端部に沈線による渦巻文が描かれていることも共通する。全体の作りでは把手正面からみて眼鏡状に空間が開けられたもの（1、5）、正面に大きな空間が開けられたもの（3、7）の2つに分られる。9は胴部文様帶に渦巻文が描かれないことから亜形といえるが、把手の形態からは前者に属する。

島之上遺跡の場合、把手部が欠損しているため詳細ははっきりしないが、残っている把手の付け根は胴部に接した最下端部から2つの柱が伸び、口縁部の縁帯部付近でも両側から空間が開く。また、口唇部からは2本の柱が伸び、把手の背面も中央に大きな空間の開くことが予想される。これらを総合すると、3のような前面、背面それぞれ2か所ずつ柱の伸びて橋状把手になることが予想される。

加曽利E I式成立期前後で把手類が著しく発達するのは、阿玉台式III式平行の湯坂遺跡T1-V土壙段階以降である。火炎土器はちょうどこの頃以降盛期で、把手発達の象徴的存在である。関東

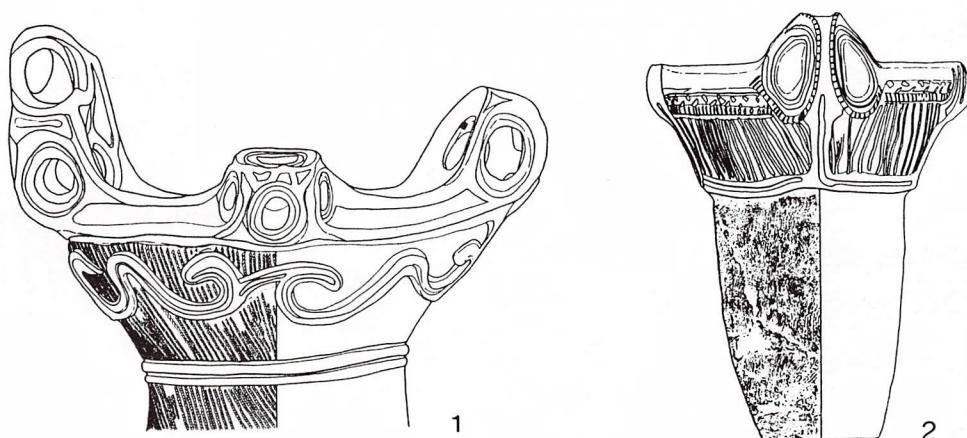
地方西部では勝坂式があるが、全く別の展開をし、その後に成立する武藏野台地型キャリパー形土器では完全な平縁化をとげていないにしてもそれほど目立つものではない。これに対し、下総台地型キャリパー形土器では、把手類の発達が著しい。分布の中心は栃木県から下総台地にかけた地域である。

東北地方でも第9図の岩手県大館町遺跡RA-105号住居跡例のような異常に発達した眼鏡状把手の例があるが、数は少ない。この地域での多くの把手類は、前段階の東北地方南部から関東地方北部で発達を遂げた把手類から変形して独自に展開したものが多いようである。また、大木8b式段階のRA-102号住居跡のなかに、正面に大きな空間の開けたタイプがあるが、必ずしも一般的なものではない。むしろ祖形は関東地方にあるといってもよいものである。

ここでは第7図に埼玉県花積貝塚（註32）例を取り上げた。1は中央、背面に大きな空間が開き、両側面も円形の空間が開けられたものである。2は眼鏡状把手の例である。第4図例をこれらの例と比較すると、細部ではかなり簡略化されているが、基本的にはよく守られていることがわかる。

このように考えると、島之上遺跡例など一群の土器は、器形を始めとして、把手のあり方、モチーフにおいても大木式の中心とされる東北地方中部から北半に系譜がたどれないことは明らかのように思われる。ただ、両者の関係をさらに突き詰めて比較するには、相互地域の土器の年代の平行関係をもっと明らかにする必要がある。現状ではまだ、それぞれの地域での実態を解き明かす段階でもあるが、このためにも周辺土器群との対比を欠かせないのが実情である。このような状況は加曾利E式土器でも大木式土器の場合でも同様であろう。

ただ、近年になって関東地方の中前期前半の土器群と東北地方南部の土器群との編年対比については各氏によって行われるようになった（註34）。編年対比が可能になったのは、その軸となる広範囲な地域で阿玉台式の出土例が知られるようになったことを一つの契機として進められることになったものであろう。特に、福島県で大規模な発掘調査が実施されたようになった結果、多くの遺跡



第7図 花積貝塚出土の把手の類例

で大木式と阿玉台式の両者が発見されるようになったことが大きい。しかし、両者の土器群に対する編年の対比や文様要素の比較は、ようやく始まったばかりであり、今後さらに細かな議論が行われることになる。また、北部地域の大木式と比較する必要も生じてこよう。これは将監塚遺跡のキャリパー形土器にみられるように、加曽利E式土器のなかには関東地方とは異なった、明らかに東北地方の文様帶のあり方を考えなければ理解できない土器群が存在する。逆に、繫遺跡例のような三単位の構成が、福島県の大畠貝塚をはるか越えた地域に存在するほか、キャリパー形土器における口縁部文様帶に採用される要素の類似性など、相互の交流を示す事例は少なくない。ここでは大木8a式から8b式にみられるいくつかの要素を拾い、若干の検討をしてみたい。

## VII

第8図は岩手県大館町遺跡RA105号住居跡で多量に出土した土器の中から古段階と思われる土器を5個体選んだものである。

1は膨らんだ口縁部と円筒形の胴部の組み合わせとなるキャリパー土器である。文様モチーフが展開するのは口縁部に限られ、胴部は地文の縄文のみである。偶然と思われるが、加曽利E I式初頭のキャリパー形土器の基本形と全く同一の器形と文様帶構成がとられる。口縁部に描かれるモチーフをみると、加曽利E I式ではS字文を基本としたモチーフなのに対し、大館町遺跡例は連続した三角区画と三角区画頂部から伸びる渦巻文で構成される。加曽利E式のS字文は、東北地方南部から関東地方北部で盛んに使われていた単位的S字文が口縁部文様帶の主文様として採用された



第8図 大館町遺跡出土大木式土器 1～5 RA105号住居跡

結果と予想される。これに対して、1のような三角区画の連続は、大木8a式のまとめた資料である岩手県西田遺跡（註35）の土器群だけでなく、さらにさかのぼることが確実な宮城県中の内A遺跡（註36）の大木7b式とされる撲糸圧痕文で描かれる土器とほとんど同一系譜上のモチーフから生成されたことは確実である。さらに古段階の土器にもこのモチーフがみられ、長い伝統的なモチーフであることがわかる。相互に交流がなく、偶然よく似たスタイルができあがった数少ない例であろう。

2の胴部にV字状のモチーフが組み合わせられる土器は、器形とともに他の地域ではあまりみられないものである。少なくとも加曽利E式成立前後の土器に限れば、東北地方中部から北半にかけての大木式系土器固有のモチーフといってよい。この二者は前段階からの伝統を引き継いだ地域固有の要素である。

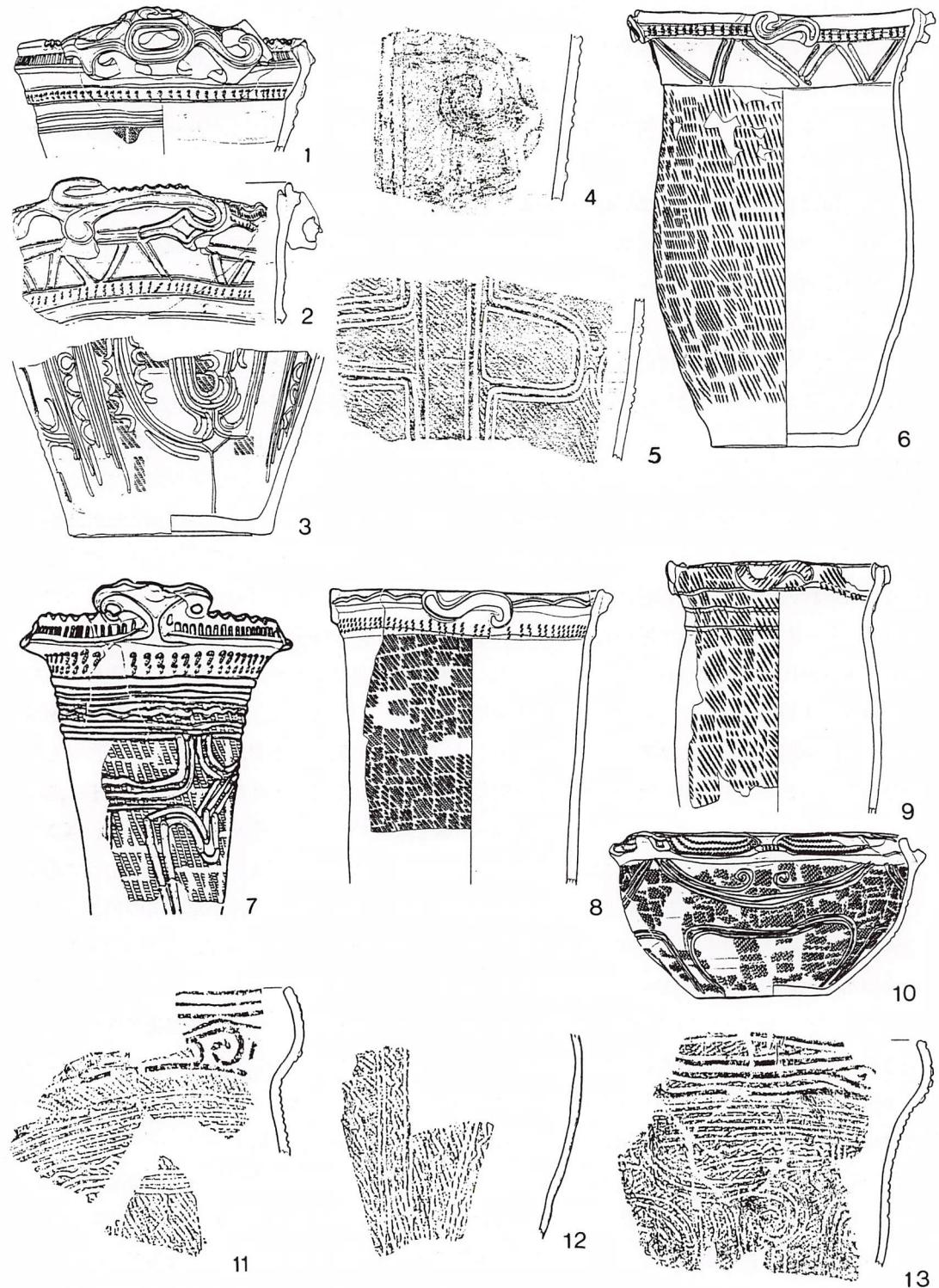
これに対して、3の土器には単位文的S字文の崩れたモチーフが付き、その下には波状隆帯文が巡る。波状隆帯文の下には多状沈線群、頸部素文帯があり、胴部との境に3条の沈線による区画線が引かれる。区画線下の器形は膨らんでおり、後の時期に一般化する東北的器形がこの段階で出現していることになる。蛇行状隆帯や文様帶の構成を1のタイプと比較すると大きな相違がある。

これと似た文様帶構成となるものに5がある。口縁部文様帶の主モチーフは3と同じ蛇行隆帯であり、胴部にはすでに3本沈線で描かれた曲折文による胴部文様帶が出現している。4の場合は口縁部に眼鏡状把手の独特な形態に発達したものが付く。多条沈線による頸部区画線との間は、蛇行隆帯に代わって縦の短切線で埋められている。この短切線は第9図1の口縁部文様帶下にみられる撲糸圧痕列の代替えとなるものであろう。また、胴部の文様帶は5と共通した曲折文と思われる。

これらの土器のうち、明らかに前代からの系譜がたどれる土器に、1、2がある。これを除いた3から5の土器では、先に説明で取り上げたようないくつもの新たな要素がみられる。このうち、加曽利E式土器の編年序列と比較される加曽利E式的要素としては、全体の文様帶の区分の方法、1の口縁部文様帶の対比でもわかるように、同一系譜上にない口縁部文様帶の採用がある。さらに口縁部の主文様である蛇行隆帯文は、下総台地型加曽利E式初頭期の代表的モチーフの一つであることは明らかである。5の眼鏡状把手の場合も異質な発達を遂げているとはいえ、その祖源としては勝坂式の眼鏡状把手、そして系譜上にある下総台地型加曽利E式にもとめざるをえないであろう。他の要素も福島県をへて関東地方東部地区まで一般的にみられる要素である。

これらの諸要素を加曽利E式側から判断される年代は、距離的隔たりによる変形を考慮しても、加曽利E式初頭から中葉の段階が考えられよう。一方、胴部にみられる曲折文としては、福島県野中遺跡（註37）のキャリパー形土器が古い段階の例といえるのではないか。丹羽氏は8a式新相としている。（註38）加曽利。E I式ではっきり出現するのは中葉の段階である。

しかし、栃木県の大木式系土器では胴部に沈線による多様な文様が描かれている。第9図1の宮城県上野遺跡（註39）の例の胴部文様帶は、この種のモチーフの変形と考えられる。加曽利E式とは地域的な隔たりがあることから、東北地方的曲折文からの変形と栃木県などにみられる沈線によるモチーフからの変形をどのように区別するかはっきりしない。さらに加曽利E式の文様帶の個体と時間による変異の幅がある。筆者側で十分な整理ができないため、どの程度さかのばらせるか



第9図 上野遺跡出土大木式土器 1～6 SK12 7～10 K9 11～13SK1

は断定できるまでに至っていない。しかし、曲折文を持たない初頭期の土器が一般的であることから、この段階を細分するか、中葉段階として位置付けるかが考えられる。はっきりした証拠があるわけではないが、現在は中葉段階と見ておこうと思う。

第9図は宮城県上野遺跡の報告書から抽出した大木8a式から8b式にかけての土器である。年代的序列としては、SK12から出土した1～6、SK9の7～10、SK1の11～13の順となる。宮城県ではこの前段階に7b式新段階として中の内A遺跡の新しいグループに置かれている。口縁部には撲糸圧痕文で描かれる三角形を基本としたモチーフがある。また、文様の主体が口縁部にあり、胴部は縄文のみの場合が多い。モチーフの系譜としては、第8図1につながるものである。SK12の場合は図示した土器でもわかるように、このタイプを思わせるものが全く存在しない。中の内A遺跡例から上野遺跡SK12例に突然変わることもありうるが、普通に考えれば、大館町遺跡例1が主体となる西田遺跡の段階が予想される。土器変化の現象からみる限りまだかなりの隔たりがあるようと思える。

SK12の土器の特徴は、口縁部が内湾するキャリパー形の土器が存在しないことである。1、2とも円筒形であり、2の器形、全体の文様帶の配置の仕方は、大木7式から伝統的なものである。

1、2の土器が持つ円筒形の器形、口縁部での文様帶の配置、口縁部上端に展開している発達したS字文の類例は、東北地方南部の大木8a式古段階の土器に広くみられる要素である。口縁部のS字文を含む文様帶の下に短い撲糸圧痕列が並ぶが、この要素はあまり南の地域に下がっていないようであり、栃木県のこの時期の土器ではほとんどみられず、この地域の特徴といえるものである。

これらの土器の年代を決める要素は、とりあえずS字隆帯文であろう。S字隆帯文の出現時期をどの段階とするかは定かでないが、阿玉台II式新段階と考えられる南堀切遺跡（註40）5号住居跡の段階には単位文的なS字隆文が含まれている。S字隆帯文は出現するが、まだ把手類の発達しない段階である。1、2に最も近い把手類としては阿玉台III式段階の大木8a式があろう。楓沢遺跡にまとまった資料がみられる。6の中央に沈線が引かれた単位文的S字隆文の場合は、楓沢遺跡では結節沈線に代っている。3は縦位を中心とした多くの沈線群で埋められ胴部文様帶は、沈線に沿って連続した弧状の短切線がある。これらの手法は、東北地方南部の大木7b式土器の区画文に沿ったモチーフとしてよく使われている。また、胴部文様帶が多重の縦位沈線を中心としたモチーフで埋める手法は、会津盆地の火炎土器には多い（註41）。このような胴部文様帶の描き方は、北陸地方の新崎式の手法の系譜上にあろう。新潟県の火炎土器の場合、最盛期の胴部にはS字文、渦巻文が主文様として目立つようになる。これと比べると、会津盆地の場合は新崎式的手法が残ることになる。

これらのいくつかの要素から考えると、3は阿玉台III式段階からあまり下がった時期ではないと思われる。

SK9から出土した土器では、1、2と同じタイプを図示した。8は文様が口縁部とその直下の撲糸圧痕の短切線列のみの土器である。10の浅鉢では口縁部に撲糸圧痕沈線がある一方、細い沈線を使った一部に先端が渦を巻くモチーフもあり、後続する曲折文とのつながりを予想させるものも存在する。7の胴部文様帶も使用される沈線は太いが、曲折文の前段階に近いモチーフである。年代を考える要素としてはこの他1の口縁部の把手、2、3の単位文的S字文がある。6と違って沈線に

よる分割が行われていない。9の単位文ではS字隆文にも縄文が施文されている。器形的には異なるが、榎沢遺跡17H炉下ピット出土例がある。手法的には阿玉台IV式で一般化するものである。7の把手は1と比較すると確かに退化したようにみえるが、個体差の可能性もある。このようにみると、年代を決定的にする要素はないが、胴部のモチーフなどを参考にすると、SK12より一段階新しく、阿玉台IV式とできるのではなかろうか。

11～13のSK 1になると、土器群の様子は一変する。まず、器形に加曽利E式土器のキャリパー形が採用されていることが挙げられる。全体の文様帯の構成も渦巻を中心とした口縁部文様帯の下に頸部素文帯が置かれ、胴部文様帯となる。口縁部文様帯のモチーフは破片のためはっきりしないが、11では三角区画文に大きくなった渦巻で構成されるようにもみえ、第8図1の大館町遺跡例的口縁部モチーフの変形したものかもしれない。13も著しく間延びしているが、同様なモチーフの可能性があり、大木8b式の典型とされるクランク文の両端に渦巻文を持つものとは異なるようである。しかし、13の胴部文様帯のように8b式で確立する曲折文がある、また、12のような細かく蛇行した懸垂文と直線の懸垂文を組み合わせた懸垂文があり、画期をなす大きな要素がみられる。

福島県野中遺跡の土器をみると、退化して蛇行隆帯ぎみとなるが、三角区画文の後裔とはっきりわかる例や、半截竹管による沈線に囲まれた細かく蛇行した懸垂文、曲折文のいずれもみられる。年代的にはこの土器群に近いことが予想されよう。野中遺跡については、小薬一夫氏らは大木8a式第4段階としている。大館町遺跡例の年代は東関東地方の加曽利E式的要素から、加曽利E I式初頭段階と考えたが、曲折文を介してみればほぼ同年代となり、野中遺跡の例も同じ列に並ぶことになる。

大木8b式の成立段階の土器としては、大松沢貝塚や山内清男氏所蔵とされる大木囲貝塚の資料（註42）が挙げられている。一方、地域的には離れるが、下総台地型キャリパー形土器に広くみられる2本の隆帯によるクランク文を口縁部文様帯に採用した大館町遺跡RA102住居跡では、大木8b式を細分できる事例として取り上げられており、下層のクランク文の土器とそれほど時間的隔たりなく成立していることが考えられる。

ところで、これまで述べたような東北地方と関東地方との年代比定が正しいという前提ではあるが、東北地方の土器と栃木県を中心とした地域の土器をみると、阿玉台IV式平行の段階では両者間に課なり似た要素がみられたのに対し、次の加曽利E I式初頭段階になると一変し、栃木県では前代からの系譜の土器、さらに新たに生まれた土器など複雑な組成となる。これに対して東北地方では土器群の様子が全く異なったものに変わり、8a式で起きた変化に続いて、8a式終末段階でもみられることになる。

関東地方で8b式的モチーフが多くの土器でみられるようになるのは、加曽利E I式中葉段階である。前稿でも触れたように、その広がり方について顕著なのが、東京都西部、神奈川県といった海岸づたいの地域（註43）である。千葉県域での実態はあまりはっきりわからず、今後の太平洋沿岸地域での出土例を持つ必要があるが、野中遺跡を介すれば、沿岸づたいに広がってきている可能性が十分考えられる。

胴部に大柄渦巻文の施される土器については、以前から問題とされてきた。特に、加曽利E式後半にみられる梶山タイプについて、神沢勇一氏が報告した梶山遺跡の土器に対し、渦巻文の存在から大木8b式と位置付けたことに始まる。当時知られていたのは、繫遺跡例で、この土器の年代は8b式であることが疑われる段階ではなかった。著者も参加した花影遺跡（註44）でたまたまこのタイプの土器が出土した。伴出土器は加曽利EⅢ式土器であり、この年代を大木式に当てはめるとすれば、従来いわれた8b式ではなく、9式平行になるであろうとして、報告したものである。年代については土器の特徴から東北地方との平行関係に比重を置いた結果である。

その後の研究の経緯については、石坂氏らの論文で細かくまとめられた。結論としては、このタイプの器形が東北地方では全く認められないことなどから、当然大木式の影響を受けているとしても、関東地方独自の変形がなければ生じえない土器であることを明らかにした。著者も当館の調査研究報告第2号で水窪遺跡の土器を扱った時、東北地方では福島県の一部の遺跡の例を除くと、東北地方では全く存在しないことに気付いた。東北地方の土器は、地文が異なるとはいえ、中部地方の唐草文土器の方がより類似していることがはっきりしたわけである。

今回検討の対象とした島之上遺跡例がどのような経緯で成立したかを明らかにすることで、加曽利E式と大木式との関係の一端を明らかにする一つの手がかりとなるのではないかと取り上げたものである。器形的には梶山タイプよりも繫遺跡例に近いことから、類例を探した。しかし、ここまで検討したように、数そのものが少なく、現在まで発見されている土器の出現時期は、早くてもEⅠ式末、遅くともEⅡ式前半と限定されている。また、意外にもこのタイプの土器の相互類似性はきわめて高く、分布する地域も栃木県を中心とし、北限は福島県と限られた地域であった。口縁部に付く把手の形態も改めてみれば、東関東地方から北関東地方で特有の把手であった。

この結果から導かれるこのタイプの系譜は、石坂氏が検討した梶山タイプとよく似た結論となることになる。しかし、それにもかかわらず、その文様の系譜が東北地方の土器群と全く無縁な存在でないことも示している。さらに、加曽利E式と大木式との関係は成立の初頭期に限らず、今回の例や梶山タイプなどから加曽利E式全般に及んでいことを示している。大木式については、丹羽氏を筆頭に近年多くの報告が提出され、様々な検討が加えられている。しかし、関東地方からみた大木式の変遷をどのように組み立てられているかについてはほとんど明らかにされていないのが実態であろう。たしかに、地域独自で編年を組み立てるため、努力をするのは当然であろう。しかし、大木式そのものは分布範囲が広く、その地域性を取り上げようとすれば、周辺土器群との関係を探っていくなければならない。本稿の最後で若干このあたりの問題を取り上げてみた。様々な疑問はあるが、本稿が今後すべき課題解明の一歩となれば幸いである。

- 註1 谷井彪他 1980 「舟山遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査報告書第9号
- 註2 栗原文藏他 1976 「水窪・新井遺跡の調査」岡部町教育委員会
- 栗原文藏他 1977 「水窪遺跡の調査」第2次 岡部町教育委員会
- 註3 笹森健一他 1977 「前畠・島之上・出口・芝山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集
- 註4 鈴木敏昭他 1983 「台耕地（I）」関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書XIV 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第27集
- 註5 黒坂禎二他 1985 「北塚屋（II）国道140号バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告書IV 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第48集
- 註6 宮井栄一他 1989 「古戸戸一縄文時代一」児玉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告V 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集
- 註7 石塚和則他 1986 「将監塚一縄文時代一」児玉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告II 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集
- 註8 谷井彪他 1987 「加曽利E式土器における口縁部文様の形態と系譜」埼玉の考古学
- 註9 神沢勇一 1970 「梶山遺跡（3）」神奈川県立博物館発掘調査報告書第4集
- 註10 石坂茂・藤巻幸男・桜岡正信 1988 「加曽利E式土器に関する一考察一いわゆる「胴部隆帯文土器」の系譜一」群馬県の考古学 創立十周年記念論集
- 註11 鈴木敏昭 1987 「加曽利E II式土器における施文構造の変容について—埼玉県北西部を中心に—」埼玉の考古学
- 註12 馬目順一他 1975 「大畑貝塚調査報告」福島県いわき市教育委員会
- 註13 青木健二 1981 「上之原遺跡発掘調査報告書」日本窯業史研究所
- 註14 芹沢清八他 1987 「御城田」栃木県埋蔵文化財調査報告第68集
- 註15 田代寛 1979 「不動院裏遺跡」栃木県那須郡黒羽町不動院裏発掘調査報告書
- 註16 海老原郁雄 1975 「梨木平遺跡第4次調査報告—縄文時代中期袋状土壤の研究一」上河内村文化財調査報告書第3集  
海老原郁雄 1986 「梨木平遺跡—第1次～第4次発掘調査の総括一」上河内村文化財調査報告書第6集
- 註17 磯上義明他 1989 「天光遺跡」福島県文化財調査報告書第219集
- 註18 吉田義明 1956 「甕棺と思われる縄文中期の土器群」石器時代3
- 註19 八木光則 1981 「大館遺跡群—昭和55年度発掘調査概要一」盛岡市教育委員会  
八木光則 1984 「大館遺跡群—昭和58年度発掘調査概要一」盛岡市教育委員会  
八木光則 1985 「大館遺跡群—昭和59年度発掘調査概要一」盛岡市教育委員会  
八木光則 1986 「大館遺跡群—昭和60年度発掘調査概要一」盛岡市教育委員会
- 註20 相原康二 1981 「大地渡遺跡」岩手県文化財調査報告第56集
- 註21 熊谷常正他 1982 「岩手県の土器」県内出土土器の集成 岩手県立博物館
- 註22 松本茂他 1982 「七郎内C遺跡・七郎内D遺跡」母畑地区遺跡発掘調査報告X
- 註23 海老原郁雄 1979 「湯坂遺跡」大田原市教育委員会

- 註24 鈴木裕芳 1980 「諏訪遺跡発掘調査報告」日立市文化財調査報告第7集
- 註25 海老原郁雄 1980 「槻沢遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告第34集
- 註26 塚田光他 1976 「中峠式土器の研究」下総考古学6
- 註27 赤山容造他 1990 「三原田遺跡」第2巻（中期前半期～後期初頭編）
- 註28 海老原郁雄 1981 「第2章 繩文時代」栃木県史 通史編1 原始古代1
- 註29 加藤孝 1956 「陸前国大松沢貝塚の研究」その1、2 宮城学院女子大学研究論文集
- 丹羽茂他 1982 「勝負沢遺跡」宮城県文化財調査報告書第83集
- 註30 唐木孝雄他 1986 「梨久保遺跡—中部山岳繩文時代集落—」郷土の文化財15 岡谷市教育委員会
- 註31 谷井彪 1990 「岡部町水窪遺跡出土の大柄渦巻文土器について」調査研究報告第2号 埼玉県立さきたま資料館
- 註32 田中清文 1984 「伊那谷繩文中期後半土器編年への展望—第I期土器群の基礎的把握—」中部高地の考古学III
- 註33 下村克彦 1970 「花積貝塚発掘調査報告」埼玉県遺跡調査会報告第15集
- 註34 谷井彪 1985 「阿玉台式からみた東北南部大木式の変遷」古代第89号  
小葉一夫・小島正裕・丹野雅人 1987 「馬高系土器群の系譜—土器型式の伝播と情報の流れー」研究論集V 東京都埋蔵文化財センター
- 塚本師也 1992 「北関東・南東北における中期前半の土器様相」古代第89号
- 註35 佐々木勝他 1980 「西田遺跡」岩手県文化財調査報告書第51集
- 註36 古川一明他 1987 「中の内A遺跡」宮城県文化財調査報告第121集
- 註37 金沢佳生・佐藤満夫・鈴木雄三 1982 「郡山市野中遺跡調査報告」福島考古第23集
- 註38 丹羽茂 1981 「大木式土器」繩文文化の研究4  
丹羽茂 1988 「中期大木式様式」繩文土器大観1
- 註39 結城慎一 1989 「上野遺跡—電力鉄塔関係発掘調査報告書ー」仙台市文化財調査報告書第127集
- 註40 根本信孝 1984 「南堀切IV」白河市教育委員会
- 註41 佐藤光義 1991 「石生前遺跡の火炎土器様式」火炎土器様式文化圏の成立と展開
- 註42 丹羽氏等の報告した「勝負沢遺跡」の報告の中で、山内清男氏所蔵といわれる大木圓貝塚出土土器の実測図が掲載されている。
- 註43 白石浩之他 1977 「当麻遺跡・上依知遺跡」神奈川県埋蔵文化財調査報告第12集  
紀野自由他 1978 「二宮遺跡 1976」秋川市埋蔵文化財調査報告書第5集
- 註44 谷井彪他 1974 「南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影」埼玉県遺跡発掘調査報告書第3集



深谷市 島之上遺跡出土の主な土器